

# 戦後の金沢文化

## 一旬刊『輿論』ほか

学習院女子短期大学教授

### 高橋新太郎

### 日誌 集書

西田園夫が自費出版した「創刊のこころ」—金沢の戦後雑誌からは（昭和48）は、「北窓」「文華」「雪国」等の、郷土が生んだ文化雑誌を探索し、戦後の金沢文化の息吹きを生き生きと伝えた労作である。敗戦後の三年ほどは、地方文化が活性化した時期であった。戦局の緊迫に付けて、縁故を求めて地方に疎開した中央文化人がこれに参画して行った。

金沢の加能屋書店から、前記の西田の著でも触れている「輿論」（昭和20年11月10日創刊、輿論社）五冊と週刊新聞『サンデイタイムス』（昭和21年2月）五部を得た。「輿論」は戦後金沢で最も早く創刊された雑誌で、全くの素人揃ひではあるけれども、再建日本には純正なる言論による民意の確立こそ絶対不可欠なりとの信念の下、一切の虚飾を避けて、ひたす

らに、事実を読者諸賢の机上に呈することを使命」とすると「編集後記」でうたつてある。同人はすべて郷里に縁故のある人達ばかりであるとも記している。創刊号は、「進駐軍を語る」特輯のほか、「再建政治のあり方」「原子爆弾を繞る世界最近の動向」「平和維持のために」と題する記事や、常設の「敗戦哲学」「国際短波」なるコラムがある。第一号からは、「新生婦人の常識」欄も設けられた。十二月には金沢本社の外、東京・京都・九州・北海道にも支社が置かれた。創刊号以来、大なり小なり原子弹に関する記事を取り上げ、国民輿論に訴えているのが特色で、第四号（12月21日）には、被爆地の学術調査班に加わった金沢医大病理学教室石川太刀雄博士の「廿世紀の神話原子弹爆弾」が発表された。編集子は「原

爆弾に関する日本否世界最初の学術的、啓蒙的原稿」と特筆している。

編集兼発行人は、元金沢医大細菌学の教室で輿論社社長の二木秀雄（創刊号のみ大山公平）である。

「サンデイタイムス」第六号（昭和21年2月3日）では、「学者の天皇制見解」として東大教授の宮沢俊義と横田喜三郎が意見を述べている。宮沢は、「世襲君主制は神秘的信仰で、しかも非合理などころに存在意義がある。……今急速にこの合理化をやると却つて軍事的なファシズム等が出てくる可能性があるのではないかといふ見透し」もあり、現段階では天皇制保持が政治的にも有利とした。横田は「儀礼機関」としての天皇制の存続を説くが、天皇制に対する人々の考え方が変化しつつあるとの認識をも示した。

金沢発行の雑誌としては、この外、辻豊次の「ヒロバ」（大地社）や三林邦太郎の特ダネ雑誌『ニュース街』（北陸情報社）等もある。

